

飯村隆彦ビデオアート作品のデジタル化と修復事業

特定非営利活動法人 ビデオアートセンター東京

【事業概要】

実験映画、ビデオアート、メディアアート分野の草分け的存在である飯村隆彦(1937-2022)のビデオテープ作品のデジタル化及びアーカイブ作業を行う。ユネスコが警鐘を鳴らすように、Uマチックとβカム方式など初期の磁気カセットテープのデジタル化が急がれる。本事業では飯村隆彦の作品が収録されているカセットテープをデジタルデータに変換し、リスト化を行った上で修復を施し、国内のメディアアートの貴重な資料としてアーカイブ化を試みる。

【事業の課題】

飯村隆彦のテープ作品約500本を対象に、テープ切断、カビなどにはテープそのものの物理的な修復を施し、再生可能にする必要がある。



アーカイブ対象テープ



カビの除去1



カビの除去2



切断テープの修復

【作業の進め方】

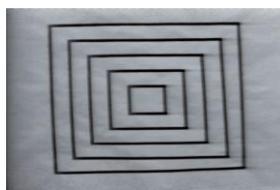
アナログテープからデジタルデータへの変換を行い、その後修復作業として画質と音質の保存の良いものを選定し、上映用のマスター動画データを作成。デジタル化したデータは複数のハードディスクに動画形式を変えた上で保管する。またその成果物としてリストを作成し、初期の飯村のテープ作品の展示・上映を行う。



作品状態の比較

【成果・公開方法】

完成した修復版の映像作品を含めた、未公開作品や完全版の作品の一般公開を行った。ドイツの国際映画祭での特集展示(令和5年2月)、京都のアートギャラリーでの展示(令和5年3月予定)。アーカイブ化された作品一覧をレゾネ・カタログとしての印刷物と、WEB上(www.vctokyo.org)でのリスト公開の両方で閲覧可能な状態にした。



【今後の課題】

今回対象としたUマチック、βカム方式のカセットテープのほか、それらの後継メディアとなったVHSやミニDVなども同様に再生が不可能になってくる。今後はそれらのテープも対象にデジタル化を進める必要がある。

【略歴】飯村隆彦(1937年-2022年)

哲学や思想的なアプローチからフィルムやビデオ、パフォーマンスを行い、戦後のアート史と映画史の交点ともいえる新しい表現分野を開拓した。国内のみならずアメリカ合衆国、フランス、ドイツなど国際的に活動が知られる。著書に『芸術と非芸術の間』(三一書房、1970)、『パリ東京映画日記』(風の薔薇社、1985)、『映像実験のために』(青土社、1986)、『映像アートの原点 1960年代』(水声社、2016)など。第19回文化庁メディア芸術祭(2015年)の功労賞を受賞。

